様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００４９２

研究課題名（和文）ドイツ文芸における「古典」概念の再検討

研究課題名（英文）Reconsider the Concept of the "Classic" in German Literature

研究代表者
大宮　勘一郎（Omiya, Kanichiro）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：４０２３３２６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトは、ドイツ文芸における「古典」概念の成立を、他国からの選択的影響、歴史化、自言語の「国語」的規範化という観点から捉え直す作業を逐次行った。その概括的成果は、言語の規範性に関する論文集『ノモスとしての言語』（ひつじ書房、2022年）の編纂・刊行と、そこに所収の論文「「国語」形成の一断面」である。発表論文は計7点である。また、古典主義期のドイツ文学のメディア史的再検討の試みであるフリードリヒ・キットラー『書き取りシステム1800・1900』の翻訳（共訳、2021年）と、古典主義の代表的作品たるゲーテの戯曲「タウリスのイフィゲーニエ」の翻訳（2022年）も刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本プロジェクトは、ちょうどCoVidヴィルスの蔓延と重なり、遂行に障害を被ったが、他方、病の流行を機縁として、不易なるものすなわち「古典」を考え直す機運の社会的高まりが実感されるなかで、研究がより深まった面もある。こうした社会的要請を単なる一過性の流行現象としてではなく、社会的共同性の基礎的価値を体現するものとして、「古典」を考え直す研究となり得たと自負する。近代文学研究においては、対象となる作品テクストの多様性が目まぐるしいが、それっらを単に拡散するに任せるのではなく、求心的な役割を担い続ける規範として、古典的テクストの果たす役割には再び注目が寄せられており、これに応じた研究となった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this project "Reconsider the Concept of the "Classic" in German Literature" is firstly to give a clear picture of the conceptual history of "the normative" in modern languages, secondly to compare the reception of the classics in German literature with that in French or English literature and finally to grasp the characteristics of the classic in German literature. The results are realized in 7 academic papers on modern German literary works, on the formation of the normative languages and on media history, 2 translations of the texts significant for the comprehension of the German understanding of the classic and 5 conference lectures.

研究分野：近代ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学　古典主義　メディア論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の学術的背景は以下の三点にあった。第一点目は文学史的背景である。ヨーロッパにおける「古典 classic, Klassik」は、古代ギリシャ・ローマの文明・文化が後世に及ぼす規範力を肯定的に表わす価値表現的概念として、主に十九世紀以降に定着する。しかし、この定着・流通の過程で、古代が近代文芸に及ぼした影響は静的な様式論すなわち「（擬）古典主義 classicism, Klassizismus」へと固定化し、古典的なるものは形式的な模倣と追従の対象に堕してしまう傾向も認められた。ゆえにまた、時代錯誤的権威主義として、あるいは生気のない形式主義として批判・攻撃に晒されもした。どちらの立場においても、古代芸術の持つ生々しい力は忘却されてしまう。他国同様に古代文芸を重要な模範としつつ成立した近代ドイツ文芸も例外ではなく、そこで形成された古典の概念にも、上記のような固定化が生じた。ただし、ドイツ文芸の成立は、フランス宮廷文化の影響からの自立という過程をたどり、固有の芸術概念の構想に向かった。こうした経緯で形成されたがゆえに、ドイツの古典概念は価値表現的なだけではなく、論争的な概念でもある。また、絶対主義王政下に興ったフランス古典主義とは異なり強大な権力の庇護を欠いたドイツでは、調和、均整、安定といった理念が重視されるものの、それらの理念が実現される動的過程の表現に力を注ぐ傾向が強いうえ、古代ローマに先行する古代ギリシャを、源流として直接参照しようとする意志がより強いのも特徴的である。つまりドイツにおける「古典」とは、準拠模倣すべき既存の型や様式であるばかりでなく、不断に追求されるべき理想を表現する動的な概念でもあり、それはまた、文学・芸術の枠内にとどまらず、「ドイツ」という歴史的共同体のあるべき姿の指標を選択的に示す機能的意義を託されたものでもあった。しかしこのことは、レッシングやシラーにおいて特に認められるように、遠く失われた理想的古代と同時代との決定的な距離の自覚に基づいている。ドイツの「古典」概念は、こうした歴史意識を不可分に含み込んでいるという意味で歴史的概念でもある。ドイツの「古典」概念の以上のような諸特徴は、古典主義、ロマン主義といった潮流の違いを超えて十八～十九世紀ドイツの文芸作品に広く認められるものだが、これまで十分に相互に関連させつつ考察されてきたとはいえない。第２点目は歴史理論的背景である。「古典」概念は、歴史的距離の克服としての歴史研究を駆り立てる動因となったが、その進歩とともに、古代への強い憧憬に裏打ちされたその規範性は必然的に相対化されていった。総じて現代の文芸においては、規範に対する感覚が希薄化しているといえようが、これは昨今に始まったものではない。例えば 19 世紀後半の美的モダニズムは、伝統的規範の拘束を脱して同時代の科学技術やメディア環境に対応する美学を模索した。ただし、これは規範的なものの拘束力を自覚した上で、それらに対抗する芸術的意志によって推進された運動であった。20 世紀後半のポストモダニズムは伝統的規範や様式を脱歴史化・脱文脈化し、それらの恣意的引用の組み合わせを手法とした。没歴史的な芸術的営為は、その対価として、知らぬままに過去を繰り返してしまうこともありはするが、他方、いったん忘却され捨てられたものが無自覚的反復の中で再び規範的な力を更新することもある。そこでは、過去の様式そのものが再現的に甦るのではなく、断片化されたうえで新たな姿に組み替えられてしまうが、断片であるにもかかわらず、あるいは断片となったがゆえにこそ際立つ様式の力がある。例えばコラージュのようなモダニズムの脱文脈的引用は、文脈を失っても残される作品断片の規範力に大きく依存する。文芸の歴史にもまた、こうした忘却と回想を認めることができるが、そうした変転を経ても、執拗に甦ることを繰り返す様式的規範力が見いだせるなら、「古典」という価値を基礎づける力もそこにあるだろう。しかもそれは、規範的様式を一旦実現させつつも、それらが破壊されてもなお働くことをやめない力動的な力としてとらえるべきものである。すでに 18 世紀のヴィンケルマンやレッシングにおいて認められるこうした力の作用に関する考察は、ヘルダーリーンなどのドイツの古代受容に大きな役割を果たした。19 世紀後半にニーチェは、古代ギリシャ芸術の静的な把握を否定する。1910～20 年代に美術史家ヴァールブルクや批評家ベンヤミンは、ニーチェの影響を受けつつ、忘却と回想、ないし破壊と再生の連鎖として歴史を捉えなおすが、そこで彼らが認めているものも、忘却や破壊を経ても甦る古代の執拗な力である。しかし、言説化した「古典」の与える静的で安定的な印象のため、こうした力動的側面の考察は、いまだ十分になされていない。第３点目は様式論的背景である。いわゆる「古典的」様式は、「調和・合理性・真実性」といった法則が貫徹した秩序によって特徴づけられるが、その捉え方には、芸術制作を取り巻く環境などに応じて違いがある。集権的政治権力の成立が遅れたドイツにおいて文芸は、宮廷芸術として政治秩序理念の矛盾なき「表象・現前 Repräsentation」を実現するという使命に応じたフランス文芸とは別の過程をたどる。フランスに倣うゴットシェートが望んだような、秩序親和型の様式確立には至らず、むしろ来るべき共同体の統一と調和を、芸術作品においていかに表現するか、という点に重点は移ってゆき、さらに 18 世紀の啓蒙主義やルソーの影響を受けながら、旧秩序の克服もまた含意されていった。そこでは様式とは、様々な力相互がせめぎ合う葛藤がもたらす緊張の高まりにおいて初めて実現するものである。ヴィンケルマンが「高貴な素朴と静かなる偉大」と定式化した古代の美術様式の必然性は、一方的な力の漲りによってもたらされるものではなく、身体の内外多方向からの力が働きあった結果一瞬生じた均衡である。

こうした様式的特徴への洞察は、文芸において「古典」概念の果たす役割を明らかにするためには不可欠である。以上三点が、「古典」概念に関していまだ十分な解明がなされておらず、取り組むべき問題として、本研究開始当初の問題意識を形成していた。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の三点にあった。第一の目的は、18 世紀後半以降のドイツにおいて特異な概念化と様式化が試みられた「古典」概念を、その成立の歴史的展開の特異性に鑑みつつ明らかとすることである。こうした概念史的取り組みは、本研究の基礎をなすものであり、無反省に広がる言説としての「古典」に対する批判的視座を与えるとともに、「古典主義」、「ロマン主義」のような区別と対立を相対化し、それらに共通の動機や要素を解明することで、新たな言説批判的文学史記述の可能性を切り拓くものである。第二の目的は、「古典」概念を、それが規範的なものの忘却と回想という歴史のダイナミズムの中で果たす役割という観点から理論的に位置づけることである。例えば現代の美術史家ディディ・ユベルマンは、ヴァールブルクの「情念定型 Pathosformel」概念とベンヤミンの「アレゴリーAllegorie」概念の歴史理論的共通性を言い当てている。こうした概念もまた、古代的なものの規範力がそもそもいかなる仕方で持続するのか考察するのに極めて有益である。近代ドイツ文芸における「古典」概念の成立と変遷を理解するには、一方向的な時間の流れではなく、むしろ過去と現在の相互干渉的な作用関係に着目する必要がある。そのためには、こうした歴史理論的考察が不可欠であるが、「古典」に対する関心が再燃した 20 世紀前半の思想史に、こうした理論の中核は多く見出される。第三の目的は、具体的な「古典」的作品に即して、その様式的特質を明らかにすることである。その際、調和や静謐など、いわゆる古典主義的様式の特徴もまた、対立や拮抗を内に秘めた均衡として再検討される必要がある。ドイツの文芸作品においては、こうした理想を表現する努力の系譜をたどることができる。とりわけ 18 世紀後半から 19 世紀前半までに多く書かれた悲劇において、拮抗対立を留保しつつ均衡を求めるという志向は顕著である。本研究は、近代ドイツ文芸における悲劇群を、「古典」の概念史に鑑みて再検討し、ドイツ近代悲劇全般に関する新たな理解可能性を提示することを最終的な課題とする。そもそもなぜ、しかもいかなる価値づけに伴われて「古典」という概念が形成されたのか、そしてそれはどのような変化をたどったのか、という問いを基礎とする本研究の問題設定は、上記三点にまとめたように、ドイツ文学研究において、個別作品解釈を深化させ、新たな反省的文学史記述の可能性を示し、文学の側から新たな歴史認識の理論に寄与することができる。ロマン主義やモダニズム、ポストモダニズムは、それぞれ別個な仕方で「古典」の対抗言説をなすと言える。その限り、それらにとっても不可欠な「古典」という概念を再検討することは、それぞればらばらな広がりを呈する近代芸術に関する諸言説を相互に連関づける役割を担うことも、将来的には目指すものでもある。

３．研究の方法

本研究の方法は、以下の三点を重視する。第一に、テクストの精緻な読み込みと、テクスト相互の比較検討である。とりわけ「古典」概念の考察には、各時代、地域ごとの比較が重要である。影響・作用関係を考えるため、いわゆる典範（カノン）的テクストの選択的な受容と、それによる変容に注目する。その際、第二に、周辺諸学の知見を幅広く取り入れることである。もとより「古典」とは、文芸ないし人文学にのみ用いられる概念ではなく、経済学さらには物理学に至るまで、あらゆる学問領域において広く用いられるものである。各分野ごとに「古典的なるもの」の歴史的編成過程はまちまちであるが、選択的受容と表裏をなす参照元としての規範性と権威の附与、という構図は概ね共通している。ドイツの文脈においては、こうした編成過程の再検討が一九〇〇年前後になされ始めた。フロイトの精神分析や、ヴァールブルクの美術史などは、その好例と言え、こうした理論と方法は本研究においても採用される。以上第一、第二の方法は、概念の形成と変容を周辺環境との関連において捉えようとする点において、概念史を根幹としている。第三の点は、海外の研究者との意見交換を積極的に行うことである。この第三の方法的支柱は、CoVid-19 ヴィルスの世界的蔓延という障害を被ったが、本研究に不可欠のものであり、可能な限り維持した。具体的には、海外のドイツ文学研究者、日本学を含む文化研究者との議論を継続的に行なった。

４．研究成果

本研究の概括的成果は、言語の規範性に関する論文集『ノモスとしての言語』（ひつじ書房、2022 年）の編纂・刊行と、そこに所収の論文「「国語」形成の一断面」である。また、古典的規範を実践的に問い直した作家であるクライストに関する論集『ハインリッヒ・フォン・クライスト　＜政治的なるもの＞をめぐる文学』を共著にて、2020 年に刊行した。加えて、古典主義期のドイツ文学のメディア史的再検討の試みであるフリードリヒ・キットラーの大著『書き取りシステム 1800・1900』の翻訳（共訳、2021 年）と、古典主義の代表的作品たるゲーテの戯曲「タウリスのイフィゲーニエ」の翻訳（2022 年）も刊行した。CoVid-19 ヴィルスの世界的蔓

延によって、海外の研究者との意見交換の機会は大きな縮小と延期を強いられた。研究者招聘は不可能となり、2021 年秋に招待されていた国際ワークショップはリモートでの参加を強いられ、講演自体はよい反響を得たものの、全体的な議論への参加は限定的なものとなった。プロジェクト期間延長後の 2022 年秋と 2023 年 2 月に、ようやくベルリン自由大学、ベルリン・フンボルト大学の研究者と直接意見交換の機会を持つことができ、また対面形式のワークショップに参加することができた。二度の国際ワークショップはいずれも「供犠」をテーマとしたもので、報告者は企画の段階から関与し、近代文芸による古典古代からの継承と変容の過程を広く論じるものとなった。本プロジェクトにとって非常に有益な議論であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 大宮勘一郎	４．巻 3
２．論文標題 「国語」形成の一断面	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ドイツ語が拓く地平　ノモスとしての言語	６．最初と最後の頁 7，39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大宮勘一郎	４．巻 -
２．論文標題 文学における絶対的な老いと若さ（『晩年のスタイル』香田芳樹編・書評）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 週間読書人	６．最初と最後の頁 ３－３
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大宮勘一郎	４．巻 -
２．論文標題 レオ・シュトラウス「迫害と著述の技法」考	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学問と社会の現在とこれからを考える	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 OMIYA, Kanichiro	４．巻 52-2
２．論文標題 Von Kokugaku zur Japanischen Romantik	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Jahrbuch fuer Internationale Germanistik	６．最初と最後の頁 185-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大宮勘一郎	4．巻 -
2．論文標題 その作家としての輪郭、圧倒的論考（『デヴィッド・ボウイ』田中純著・書評）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 週刊読書人	6．最初と最後の頁 5-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　4件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 OMIYA, Kanichiro
2．発表標題 Hofmannsthals Opferdiskurs im "Gespraech ueber Gedichte" und in der "Elektra"
3．学会等名 Opferdramaturgie nach dem buergerlichen Trauerspiel（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 OMIYA, Kanichiro
2．発表標題 What is Benjamin's Passagen-Werk?
3．学会等名 Workshop of Goethe-Institut, Tokyo（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 OMIYA, Kanichiro
2．発表標題 Einige kritische Anmerkungen zur empirischen Aesthetik
3．学会等名 Alexander vonHumboldt-Kolleg（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 OMIYA, Kanichiro
２．発表標題 Die Sprache der Toten. Die historische Dimension des "Habitus"-Begriffs und die "Pathosformel" bei Aby Warburg
３．学会等名 Kulturseminar der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 OMIYA, Kanichiro
２．発表標題 Begnadete Helden oder ausgebliebene Opfer. Candide, Egmont, Prinz von Homburg und der Offizier in der Strafkolonie zwischen Rettung und Entehrung des Opfers
３．学会等名 Opferdramaturgie und Viktimologie der Geschlechter in Prosa und Film（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計3件

１．著者名 フリードリヒ・キットラー、大宮勘一郎、石田雄一	４．発行年 2021年
２．出版社 インスクリプト	５．総ページ数 838
３．書名 書き取りシステム　1800・1900	

１．著者名 大宮勘一郎ほか	４．発行年 2020年
２．出版社 インスクリプト	５．総ページ数 358
３．書名 ハインリッヒ・フォン・クライスト　「政治的なるもの」をめぐる文学	

１．著者名 ゲーテ、大宮勘一郎	４．発行年 2023年
２．出版社 作品社	５．総ページ数 408
３．書名 若きヴェルターの悩み／タウリスのイフィゲーニエ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関